様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年　４月　８日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2012
課題番号：20530253
研究課題名（和文）拠出国の開発援助支出に関する動機と傾向
研究課題名（英文）Motives of Donor Countries on their Official Development Assistances

研究代表者
高瀬　浩一（TAKASE KOICHI）
早稲田大学・商学学術院・教授
研究者番号：50289518

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：経済学・経済政策
キーワード：経済発展、開発援助

１．研究計画の概要

(1) 最も一般的なケースとして、利己的な拠出国と受入国の仮定の下、両国の（所得や資源の）初期状態を所与として、単純なゲーム理論的枠組みで援助分配の分析を試みる。つまり、新古典派生産関数を仮定した１財モデルを基に、簡単なゲーム的状況を念頭に置きながら、拠出国と受入国がそれぞれ取る行動とその結果について分析する。その後、拠出国や受入国の数を複数として、お互いの生産要素や生産関数に関する不確実性や非対称性を導入し、利他的な動機も加えたケースも分析する。

(2) 上記の理論モデルから統計分析のための計量モデルを導出する。計量分析に用いる援助パネルデータは、CRS データを中心に構成する。最初に計量分析の準備として、パネルデータの基本統計量分析を行う。その後、STATA などの統計分析ソフトを使い、回帰分析などの計量分析を行う。全世界のみならず、アジアや EU などの広い地域から、日本やアメリカなどの代表的な拠出国、あるいは、中国、インドネシア、タイなどの受入国別の分析も行う。さらに、BRICS 諸国などの新興拠出国のデータ収集も可能な限り進める。

２．研究の進捗状況

(1) 二国間援助の理論モデルのベースはある程度の形となった。主な知見として、第１に、拠出国が利己的であっても、生産要素に大きな差がある場合、つまり、受入国の生産要素が非常に小さいときは、お互いにとって有利な開発援助的なフローが実現しうる。第２に、援助契約が結ばれるためには、受入国から拠出国へ何らかの利益配分がなされる必要がある。

(2) CRS データを中心に DAC 基準に従い、各受入国・各拠出国別に主要セクター別に要約したパネルデータを構築した。

①OECD 加盟国のうち世界の主要な開発援助（ODA）拠出国が、開発援助委員会（DAC）を組織し、その加盟拠出国別に援助データをまとめた年報（DAC Annual Report）を発行している。現在、世界の開発援助支出の最も詳細なパネルデータセットである CRS データと比較するためにも、DAC の受入国分類（LLDC、LDC、MDC など）リストの年次データを構築した。

②日本の開発援助（ODA）支出データの更新を行った。データが完全に公開されている新 JICA の援助支出を中心にして、OECD の下部組織である DAC（開発援助委員会）基準による目的・分野別に分類した。

③地方自治体による開発援助を含む広い意味での海外協力支出の分析に着手した。各地方自治体が執行している ODA 案件の数と額は、中央政府と比較して圧倒的に少数であろうが、ODA として配分していること自体は間違いなさそうである。つまり、各自治体は中央省庁と同様にそれぞれ ODA を配分している援助機関とみなすことができる。各自治体が独自に行っている海外支援等の支出は、おそらく日本の ODA 支出には含まれておら

ず、厳密には ODA データの漏れとなっている可能性が高いのである。

３．現在までの達成度

③やや遅れている。

(1) 二国間援助の理論モデルのベースは、研究結果が学会発表や論文として公表されつつある。利己的な拠出国と受入国との開発援助契約に関しては、簡単なゲーム理論の応用として分析された。利他的な拠出国による開発援助の動学的効率性については、新古典派マクロ動学モデル（重複世代モデル）を基に援助の様々なモダリティーの比較を行った。

(2) ただし、開発援助を中心とした海外協力支出のパネルデータ構築とその応用に関しては、以下にあるような理由により、想定より進捗状況が停滞しているものもある。

DAC による援助受入国リストは、１人当たり GNI の基準が年度により変化しているため、予想以上に不安定になった。拠出・受入の両サイドからの国際社会における政治的・経済的影響によるのかもしれないが、このリストによる援助配分の分析はかなり難しくなった。

新興援助拠出国の海外協力支出パネルデータ構築は、一般的に公開されているデータソース自体が存在しないという理由で停滞している。OECD メンバーであり、最近 DAC にも加盟した韓国は極めて小額ではあるが、DAC 基準の ODA データが公開されている。しかし、BRICS 諸国は ODA データとして公開されているものが極端に少なく、かつ、DAC 標準でもないため、国際的に比較できるパネルデータを構築するには非常に困難である。

日本国内の ODA パネルデータの構築は、やはりデータ公開の壁にかなり苦労させられている。JICA 以外の省庁が担当した ODA もできるだけ網羅するように努力したが、相変わらず複数の省庁において完全公開されておらず、DAC に報告されている日本の ODA 全体との比較は不可能となった。技術援助に関しては、JICA も各案件別支出額を全て公開しているわけではなく、更なる情報公開が望まれる。

４．今後の研究の推進方策

(1) 日本の二国間 ODA に関して、DAC 基準（CRS）の広い意味での見直しを行う。従来から、CRS による ODA の支出目的別分類は大きな問題を抱えていた。それは、単一の ODA プロジェクトの金額がどれほど大きくても、あるいは、その効果がどれほど広範であったとしても、CRS の分類は１つに限られていることである。例えば、巨大なダムプロジェクトは、その直接的効果だけでも、建築、上水道、農業用水、工業用水、発電、アルミニウム・肥料生産など広範にわたり、間接的には、ダムや発電所の管理能力や公衆衛生の向上など現地の人々に対する影響も大きいと予想される。一方、その支出は CRS によると（多目的）ダム（建築）のみに分類される。この問題を解決するため、各プロジェクトに対して、影響を受ける複数のセクターを表す変数を加える。

(2) 地方自治体による開発援助を含む広い意味での海外協力支出のデータ収集を進める。インターネットへの情報公開度が高いという理由から、最近の群馬県と神奈川県のデータからスタートする。

５．代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①清水弘幸・高瀬浩一「狩猟から農耕社会への移行と拡大：「協業と社会的資本」によるマクロ動学的考察」『早稲田商学』428 (2011)71-93 査読無

②Toshiro K, and Takase Y K「Foreign aid negotiations by a selfish donor」『Waseda Business & Economics Studies』46 (2010)59-75 査読無

③菊地俊郎・高瀬浩一「国家間交渉としての開発援助に関する研究への試行：戦略的分析による基礎的考察」『国際開発研究（特集　開発援助の再生）』国際開発学会 18: 2 (2009)63-74 査読無

〔学会発表〕（計３件）

①高瀬浩一「Modalities of Foreign Aid and Economic Growth」『国際開発学会（JASID）第 21 回全国大会』早稲田大学（2010 年 12 月 5 日）査読有

②Takase Y K「Intertemporal Distribution of Foreign aid: Multiple Modalities and Ownerships」『Far Eastern and South Asian Meeting of Econometric Society 2009 (2009 FESAMES)』University of Tokyo（August 3, 2009）査読有

③高瀬浩一「Capacity Development and Foreign aid from Japan」『国際開発協力におけるキャパシティ・ディベロップメントと制度変化に関する国際セミナー』国際協力機構（JICA）・国際協力総合研修所・国際会議場（2008 年 7 月 18 日）査読無